令和元（２０１９）年度　御船町立高木小学校　学校便り

高き志【こころざし】

目指す学校像
地域とともにある
勢いのある学校

No。24（R元．10．31発行）文責 校長 福田雅也

道徳教育がなかった時代は…

日本の学校では「宗教」という授業が行われているのをご存知でしょうか。しかし、この授業を受けたことがあるという方はそう多くはないのだと思います。実は、この授業は、私立学校に限って、「道徳」に代えて加えることができるのです。少し難しい話になりますが、学校教育法施行規則第五十条２項に「私立の小学校の教育課程を編成する場合は、前項の規定にかかわらず、宗教を加えることができる。この場合においては、宗教をもって前項の道徳に代えることができる。」と明記されているのです。（なお、七十九条にこの内容は中学校にも準用すると示されています）したがって、カトリック系や仏教系の私立学校に通った方は、この授業を受けた経験をお持ちかもしれません。

幼いころ、校区内のお寺で行われたお祭りで、「地獄」の様子が描かれた掛け軸を見た記憶が強烈に残っています。幼かった私は、その絵の怖さに怯え、それと同時に聞いた「悪いことをすると地獄に落ちる」という言葉に、絶対に悪いことはしないと思ったことを覚えています。（その時思っただけで、長くは続かなかったのですが…）

このようにどんな宗教も、天国や地獄の存在や輪廻の考え方、神の存在を通してではありますが「道徳性」を諭している部分があるのだと思います。これが「宗教」を「道徳」に代えることができるということにつながっているのでしょう。学習指導要領の総則編には、そのことが次のように書かれています。「宗教教育はその本質からして、それを通して道徳性の涵養も行われるものとみることができる。」

「学校」も「道徳教育」もなかった時代に、人々が道徳性について考えたり、それを実行に移すことができたりしたのは、その宗教が何であるかに関わらず、「宗教」によるところが大きかったのではないかと思います。

また、日本に限って考えれば、地域の伝統文化や風習が担っていた部分もあったのではないかと考えられます。例えば、秋田県に伝わる「なまはげ」は、子どもに道徳性のある行動を教える機会となっていたのではないでしょうか。「なまはげ」と似た風習は日本各地に点在し、九州では鹿児島県甑島地方の「トシドン」が有名です。

ここまで考えたところで、気付いたのは、これらに共通して言えることがあるのではないかということです。それは、人間の長い歴史や日々の営みの中で培われてきたことであり、素晴らしい面は沢山ありますが、科学的な視点には欠ける面がある、ということです。そして、このことが日本の公教育の中では、「宗教」ではなく、「道徳」が行われている一つの理由なのだろうと思いました。

学校では「道徳教育」によって、道徳性をしっかりと身につけさせていきます。しかし、宗教や伝統文化、風習等の良さを最大限に活用して子どもたちに道徳性を身につけさせるという視点は、家庭教育や地域での教育の中にはあっていいのだと思います。